



# 教皇様の教

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticano の転載許可済  
©1990  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 見るための目と 聞くための耳を！

**1** 使徒聖ヨハネは喜びにあふれる情熱をもって、「御父のみもとにあって今私たちに現れた永遠の命」と手紙に記しています。(ヨハネ①1・2) その命は私たちのすぐそばにあり、「目で見る」と「手で触れること」ができます。これは、ヨハネが特に強調している福音のメッセージの本質的な内容、受肉(託身)の秘義を示しています。すなわち、「肉となり」私たちの間に留まるために「来られることばの秘義、私たちがもうすぐ祝う降誕の秘義です。神の無限の命、崇むべき命、完全で欠けるところのない命、超越的で超自然の命は私たちに会いに来られ、私たちに与えられ、人間に近づきやすいものとなり、実際に手に入るもの、人間の完全な幸福として提供されたのです。しばしば、自分の自然の命さえ大切にし尊重することので

きない私たち、脆弱な被造物が、神の永遠の命に与れる存在であること、一体誰が考えついたでしょう。神の無限の慈しみ深い愛がそれを教えてくださったらなかったなら、誰が想像できたでしょう。

これが人間の運命なのです。最もみじめな罪人や生命を拒否する人も含めた全ての人々に与えられた幸運な宿命です。天の父がキリストにおいて望まれたので、全ての人は神の命そのものに参与することができのです。これがキリスト教のメッセージであり、降誕祭のメッセージでもあります。

**2** ヨハネは言います。「この命は現れた、私たちはそれを見て証明する。(…)永遠の命をあなたたちに告げる(前出) イエズスが人間の体をもってこの地上で過されたから二千年たった今日、私たちは、

ヨハネや他の使徒たちと同じイエズスとの生活を体験することはできません。

しかし、それでも私たちは今日、イエズスの証人となれますし、またそうならなければなりません。証人とはどういう人のことを言うのでしょうか。それは「その出来事に居合わせた」人、自分が証言することを「目で見、手で触れた」人のことです。つまり直接の経験に裏づけされた知識をもった人のことです。

二千年たった今、私たちはいかにしてキリストについての知識をもつことができるのでしょうか。いかにして「キリストの証人」となることができるのでしょうか。

私たちが承知し、公会議が思い出させているように、今も、常に、そして世の終わりまで、キリストは私たちの間に様々な姿で現存しておられます。典礼、御言葉、司祭職、弱い人々や困っている人々などの内においてになります。これらの現存が人に見えようとしなければなりません。命の真の交わりという直接の知識で、私たちは「見るための目と聞くための耳」を持たなければなりません。



### Merry Christmas

**3** 親愛なる兄弟姉妹の皆さん。もうすぐ訪れる降誕祭が、皆さんにとってキリストとの命の交わりを成長させるものとなりますように。素直に信仰の光に照らされるようにしましょう。降誕祭についての福音と教会の教えを単純さと信頼の心で受入れましょう。降誕祭を意義深く生きることができるようになってくれるのは、この教えの真理なのです。それは、いくぶん皆さんを使徒ヨハネのように、「命を目で見、手で触れ」させてくれるでしょう。いずれにしても、この段階に達するまでは、主キリストの本当の弟子だと言

うことはできません。私たちの旅はまだ終わっていないし、霊的にも未熟なままです。聖パウロの言葉を借りれば、私たちはまだ「大人」ではありません。(コリント①4・20)

降誕祭の秘義を真に深く理解するには、信仰だけでなく善行、正義、慈悲の行為を通しての愛徳が必要です。このようにして初めて、聖ヨハネが語る命の交わりから生じ、また命の交わりに導く不思議な「体験」をすることができるようになるでしょう。「あなたたちを私たちに一致させるために、私たちは見たこと聞いたことを告げる」と聖ヨハネは言います。(ヨハネ①1・3) 降誕祭の体験は愛から生れ、愛に照らされ、愛を生み、愛を広げます。そして、「私たちのこの一致は、御父と御子イエズス・キリストのものである」と説明しています。(前出) 降誕祭の秘義は交わり(一致)の源です。それは、御独り子イエズス・キリスト

における神との交わりだからです。現れた命に触れ、命を見ることよって私たちは死から生命へと移り、病は癒され、命にあふれます。そして、他の人々に命を伝えられます。

4 この命の目的は何でしょうか。聖ヨハネは「私たちの喜びを全うするため」と語っています。(同4節参照) 神、そして私たちの兄弟姉妹との命の交わりの広がり効果こそ、本物の喜びです。誰もが本能的に幸福を求めています。それ自体自然なことです。しかし私たちは、いつもどこに真の喜びがあるかを知っているでしょうか。若い皆さんはそれを知っていますか。大人の方はご存じですか。キリスト者は真の喜びがどこにあるかを知っています。

それは神との交わりの中に、兄弟との交わりの中にあります。私たちの内に来られる方、降誕祭に肉となられる神で、地上の他の子供と同じようにお生れになり、貧しい人々の中の一人、助けを必要とする人々の一人としてお生れになる方に対し、私たちの心を開くことの中にあります。最も崇高な神が幼子となられます。無限の尊厳を失うことなく、私たちの無限のみじめさを引き受け、自分ものものとされます。そして、その後には神の子は、ある方法でその神性を隠されます。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。私の願いは、皆さんがこれらの永遠の生命の実りを豊かに結ぶことです。聖霊がその上智と聡明の賜をもって、降誕祭の秘義、光の秘義、交わり、主における喜びを深く理解できるように導いてくださいますように。

# 真の喜びは



## 神から

★ 「すべての人々のための大きな喜びの知らせを告げる。」(ルカ2・10)

ベトレヘムの羊飼いが、大きな喜びの知らせを聞いたのは、ちょうど今日のような夜でした。今夜、私たちはその同じ喜びの知らせを聞くため、ここ聖ペトロ大聖堂に集まっています。

そして、私たちと同じように、私たちの兄弟姉妹が世界中の多くの所でひとつに集まっています。

ローマの司教は、彼らが集まっている所がどこであろうとも、同じ言葉で全ての人にあいさつします。「大きな喜びの知らせをあなたたちに告げよう」と。(…)

★ この知らせは人間に向けられたものではありません。降誕祭の深夜、典礼は全ての被造物にも喜ぶよう呼びかけているからです。

天は喜び地は踊り、海とそこに満ちるものは鳴りわたり、野とそこに満ちるものは喜びいさみ、森の木々は声を上げんことを、新しい歌を主にうたえ、全地よ、主にうたえ。(詩篇96節、11、12、1)

このように、全ての被造物は、ベトレヘムでのこの宣言を聞いて喜ぶよう招かれています。というのも処女マリヤからお生れになる御方は、「すべての被造物の長子である」からです。(コロサイ1・15) その御方において、その御方を通して、全てのものは造られたのです。それゆえ、被造物の中に見出される全てのよいものは、その起源と原型をその御方の内にもっているのです。

御父は、かつて全ての被造物を御覧になり「よしとして満足された。」(創世1・10、31参照)

このベトレヘムの夜、私たちは再び創造の御業を喜ぶように招かれます。

★ 「すべての人々のための大きな喜びの知らせを、あなたたちに告げよう。」

全ての被造物の長子、御子御自身、つまり永遠のみことばが被造物の中に来られたその時、創造の御業に対するこの喜びは再確認され、高められます。

被造物は、自らの限界と、その存在と知識の限界とを越える頂点に達するのです。「おまえは喜びをふやし、うれしさを増され」た。(イザヤ9・2)

しかし、この頂点に達することの

できる被造物は、人間のみです。なぜなら、創世の書のはじめの方に、神の尊い似姿として造られた人間について述べられているからです。ベトレヘムのあの夜、人間についてのこの真理は、完全に確認されるだけでなく、さらに深められます。

「私たちのために一人のみどり子が生まれ、子が与えられ」た。(イザヤ9・5) ベトレヘムのあの夜、一人のみどり児、すなわち(人の子)が生れた。マリヤは「月満ちて、初子を生んだので、布に包んでまぐさおけに子を横たえた。」(ルカ2・6、7)

★ このみどり児、女から生れる他の子と同じ人間の子(人の子)を「ごらんさない。」

このみどり児は、神の御独り子です。独り子は私たちに与えられました。御独り子は、御父によって私たちに与えられたのです。独り子は人間とこの世界とに与えられました。

「神は御独り子を与えたまうほどの世を愛された。」(ヨハネ3・16)

「御独り子は、私たちに与えられた。」

御父と一つであるこの永遠の御独り子において、神御自身が人類と世界の歴史の中に入って来られたのです。御独り子において「すべての人間の救いのもととして神の恩寵は現れた。」(ティト2・11)

御自分の似姿として人間を造られた神は、人間がどんなものであるか

をご存じです。神は人間の心を知っておられます。神は、人間の心が神の内に憩うまで安らぐことがないのをご存じです。(アウグスチヌス『告白録』1・1参照)

★ 「すべての人々のための大きな喜びの知らせを告げる。」(…)

今日、(…) あなたたちのために救い主が生まれたもうた。(ルカ2・10、11)

しかし、この喜びは私たちが望んでいるように、純粹で完全なものでしょうか。

いちがいにそうとは言えません。その喜びは悲しい影に覆い隠されているからです。そのみどり児、神の御独り子は馬小屋でお生れになりました。それは、宿屋に部屋がなかったからです。(ルカ2・7参照)

★ 主の到来の時は、また拒絶の時でもありました。「部屋がなかった。」この悲しい影は長く伸び、ゴルゴタの十字架の上での主の死去にまで達しています。このようにして、御父の愛によって私たちに与えられた御独り子は、人間から拒絶されるのです。「イエズスは私たちが罪からあがなうために御自分を与えられた。」(ティト2・14)

★ 心を一つにする兄弟姉妹と共に、ここに集まっています私た

「子」とも「秘跡」  
ライト枢機卿・他著  
井上博嗣、平井英子訳  
定価七三三円



# 説教・講話・書簡等の抄記

ちは、聖体のいけにえの典礼に参加し、神の誕生を歓迎します。それは私たちのあがないのためのいけにえです。このいけにえは、キリストの過越の秘義である十字架と復活を再現します。この秘義は、救い主が私たちのためにお生れになったベトレヘムでのこの夜に始まります。人類のあがないの主、世界のあがないの主の誕生なのです。

今夜「大きな喜び」を宣言する教会は、この喜びが完全に神から来る

ことを知っています。それは、神の愛の贈り物です。

教会はまた、この喜びだけが、人の心を時間のかたに、つまり神御自身が人間のために用意された次元にまで広がることを知っています。

だからこそ、今夜も教会は世界に次の言葉を繰り返すのです。「すべての人々のために大きな喜びの知らせをあなたたちに告げよう。今日、あなたたちのために救い主が生まれたまうた。」(八九・十二・二五)

信仰の形成は、個人的な祈りと秘跡、特に「キリスト教生活全体の泉であり頂点である聖体」(『教会憲章』11)にもとづくものでなければなりません。聖体の秘跡に与ることなしには、霊的成長は疎外され、聖性の花を咲かせることはできません。そして、聖体をふさわしく拝領するためには、赦しの秘跡に注意が払われなければなりません。(『人間の贖い主』20)

「聖霊を受けよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない。」(ヨハネ20・22)

信仰の知識、秘跡的な生活(秘跡を中心とした生活)、派遣された者であるという意識、これらは信徒の形成における根本的な面です。

しかし、これらの目標を実現させるためには、「司教の權威のもとに、自分にゆだねられた羊の群れの一部を聖化し治め」(『教会憲章』28)る司祭の数と質、及び特別な聖別によって神の国に奉仕することを旨とし、愛徳の完成のために戦う、(『教会法典』573)男女の修道者たちに注意を払わねばなりません。司祭と修道者は、信徒にその使命を思い

## 信仰教育と秘跡

この二つの秘跡の密接なつながりに関する要理教育は、幼時に、初告解の後で初聖体に与ることによって正しく与えられます。罪の告白に対する人々の消極的な態度は、今日この秘跡の刷新にとっての一つの挑戦です。しかしキリストが偉大な賜、聖なる信頼として制定された方法で信者が神と和解するよう教育が望むならば、それは無視することのできない挑戦であると言ふこと

出させるだけでなく、彼らの形成に携わり、教会と世界において信徒が自らの役割を果たすよう励まします。(九〇・五)

## 「至福八端」

「人々の群れを見たイエズスは、山に登って座られた。弟子たちはそばに近寄った。イエズスは話し始めて、こう教えられた。」(マテオ5・1-2)

今日ここに集まっている私たちにもイエズスは同じ言葉で教えられるべきです。

ここローマの墓地でも至福八端の福音を示されます。世界中の沢山の墓地でも示されます。この世に生きる私たちはそれを聞き、故人となった兄弟姉妹が眠る墓もそれに耳を傾けます。

至福八端の福音は死者にも語りかけているのでしょうか。死について語っているのでしょうか。

「愛する者たちよ、私たちはいま神の子である。後にどうなるかはまだ示されていないが。」(ヨハネ13・2)

墓地は地上の生活の終りの場所にすぎないのでしょうか。

そこは、この地上では「まだ示されていない」ことの始まりでもあるのではないのでしょうか。新たな生命の始まりでもあるのではないのでしょうか。

そうです。「私たちは神の子である」(ヨハネ13・1参照)という言葉こそこの世で聞いています。事実、キリストがはっきりと言われたように、「私たちは神の子」なのです。

ヨハネの手紙に記されているように、御父より生れたキリストは言われました。「御父から計りがたい愛を受けた(前出)」と。

「御父から受けた計りがたい愛」より出る生命なのです。(八九・十一・一)

「この世の生命が死によって終るとは、誰もが知っています。従って至福八端は、死について語っています。ただし、過ぎ去るこの世の生命と神における永遠の生命というリズムを通して語りかけてくれます。」

この墓地(カンポ・ペラノの聖堂)

と世界中の墓地で、この至福八端は今日まことに雄弁に語りかけます。

至福八端の一つひとつが、墓に眠る人たちに問いかけます。あなたは心の貧しい人でしたか？ 正義に飢えていましたか？ 憐れみをもっていましたか？ 心の清い人でしたか？ 平和のために励みましたか？ 正義のために迫害を受けましたか？

「キリストのために」人々の迫害、のしり、讒言に耐えられたか？ キリストのために責め苦を受けましたか？(マテオ5・3-11参照)

生涯を通じて多くの苦しみと悲しみに耐えられたか。ローマの墓地と世界中の墓地に眠っている兄弟姉妹の一人ひとりがこの世を去るに当りこの質問に添って地上での生活を糾明しなければなりません。

誰もが永遠の生命の展望へと進むためにこの世の生命を閉じます。これは神における生命、神の国、天国です。時を通り死との境界線に向かって進んでいく私たち、その旅人である私たちのために神は王国、永遠の生命をおはからいになるのです。私たちは教会と共に、今日と明日、特別の方法でこれを体験します。

今日と明日、愛する兄弟の墓の前に立って尋ねます。あなたは生ける神を求め人々に属していませんか。ヤコブの神の御顔を捜し求めた人々の内の一人ですか。

人間は、過ぎ行く一時的な命を通して、この地上で巡礼の旅を続けています。それは「神をそのまま見る」

(ヨハネ13・2参照)のために、生ける神の御顔に向かって進む旅です。人間は死を免れないものですが、同時に絶対的な神へと向かう旅人でもあるのです。

「愛する者たちよ、私たちはいま神の子である。後にどうなるかはまだ示されていないが。」(ヨハネ13・2)

墓地は地上の生活の終りの場所にすぎないのでしょうか。

そこは、この地上では「まだ示されていない」ことの始まりでもあるのではないのでしょうか。新たな生命の始まりでもあるのではないのでしょうか。

そうです。「私たちは神の子である」(ヨハネ13・1参照)という言葉こそこの世で聞いています。事実、キリストがはっきりと言われたように、「私たちは神の子」なのです。

ヨハネの手紙に記されているように、御父より生れたキリストは言われました。「御父から計りがたい愛を受けた(前出)」と。

福音の全てがそれを伝えてくれます。とりわけ至福八端がこの点についてはっきり伝えてくれます。それは、キリストの死——十字架、復活——を通して示されました。

11月の最初の日に墓地を訪れ、この福音に耳を傾けましょう。この墓地に葬られた死者の墓標を通してキリストは永遠の生命の真理を宣言しておられます。死よりも強い生命です。

「子供の性教育」 E・A・ホルダン著  
中島紀子訳記  
定価八〇〇円

# 不変の教え

## 悪の力と戦う

### 「罪」シリーズ ⑩

**1** 第二バティカン公会議の『現代世界憲章』の序文にこう書かれています。「公会議はここで、人間の世界、つまり人類全家族との家族がその中で生活している諸現実の総体を思いうかべている。それは人類の歴史が演じられていく舞台であり、人間の努力と失敗と勝利が刻みつけられている世界である。この世界はキリスト信者の信仰によって、創造主の愛によって造られ保たれており、罪のどれい状態に陥ったが、キリストの十字架の死と復活とによって『悪しき者』の権力が破壊され、解放された世界であり、こうして神の計画に従って改善されてゆき、ついには完成に達する世界である。(1)」

**2** これこそ、このカテケージズの展望を示すものです。そもその初め、人類の全歴史を通しての悪の実体、罪の実体をとりあげています。罪の総合的なイメージを復元しようと、何世紀にもわたる人類の多種多様な経験から学び得た全てのものを利用してあります。しかし、罪はそれ自体、悪の秘義であること忘れてはいけません。罪の歴史的な始まりやその相づく展開は、創造主——特に御自身の似姿である人間の創り主としての神——の秘義に言及することなしには十分に理解できる

ものではありませぬ。先に引用した公会議の言葉は、このカテケージズの最初から注目していたように、悪と罪の秘義(不義の秘義)は(贖いの秘義)、イエズス・キリストの(過越の秘義)に言及しなければ理解できないということですよ。明らかに、この(信仰の論理)は最も古い幾つもの信経の中で表されています。

**3** 教会はこの罪についての真理の見解を絶えず宣言し公言してきました。それは、創世の書にみられる贖いの最初の宣言の時以来、私たち知らされてきたものです。事実、創造主である神が人間と結んだ最も古い契約に関わる最初の掟に人間が背いた後、創世の書は次の対話を示します。「主なる神は、男を呼んで『どこにいるのか』と仰せられた。『園であなただの足音を聞きましたが、私は裸なので、こわくなって、隠れました』と男は言った。『裸であることを、だれがおまえに言ったのか。さては、私が食べるなど命じたあの木の実を食べたのだな。』男は答えた、『あなたが私のそばにいてくださった女が、あの木の実をくれたので、私も食べました。』主なる神は女に向かって仰せられた、『どうしてそんなことをしたのか。』女は答えた、『へびにだまされて食べました。』(創世3・9・13)

「そこで、主なる神はへびに向かつて仰せられた、『おまえは、そのようなことをしたのだから…のろわれたものとなる。』私は、おまえと女との間に、おまえのすえと女のすえとの間に、敵意を置く。女のすえは、おまえの頭を踏みくだき、おまえのすえは、女のすえのかかとをねらうであろう。』(創世3・14・15)

**4** サタンの言葉の吟味や最初の罪の描写から、すでにわかっ

皆さんは社会の責任に関する職業上の地位と役割を有しておられますから、信徒が社会生活で自らの特別の役割を意識することがいかに大切かにお気づきのことでしょう。私は信徒に対する使徒的勧告の中で、「信徒にとって世の中で活動することは、単に人間的、社会的現実に留まらず、特有なあり方で神学的・教会的現実でもある。実際、信徒がこの世でおかれて、いる状況の中で、神は御計画を示し、信徒に固有な召出しを伝えられる(15)」と強調しました。皆さんの専門職では、人間の神聖な尊厳に関わる権利を守るため貢献することこそ、絶えず続けねばならないのです。「人間の尊厳は個人の有するもつとも貴重な財産です。(…)」ひとりの人間には物質の世界すべてをはるかに越える価値が

ている真理を示す表現や方法という点でも、創世の書第三章の文は(ヤーウィスト)の文脈と調和よく適合しています。聖書の表現による外観にも拘わらず、本質的な真理は、それ自体明らかかなものです。真理はそれ自体理解されるものです。しかし、聖書全体の中でこのテーマについて述べられている事柄を考えると、また聖書のより完全でより全体的な意味の中で考えることによって、この真理は一層あきらかに

章の続きの部分)は、人間の罪に対する神の答えについて述べています。それは最初の罪に対する直接の答えであると同時に、地上での人類の終りに至るまでの将来の歴史全体を見通した答でもあります。創世の書と黙示録との間には真実の連続性が存在し、神によって啓示された真理には深遠な一貫性が存在します。啓示のもつこの調和のとれた一貫性は、自覚して信じる人のもつ(信仰の論理)があてはまるものです。罪に関する真理は、この論理の発展の中に含まれています。(次号に続きます)

## 法律と人間の尊厳

〈司法関係者へ〉

ある(37) ですから、人間を物として考えたり扱ったりすることはできません。それは、人間の存在の初期の段階から言えることです。まだ生れていない生命の保護について、この人類的、哲学的な出発点から理解しなければなりません。神学や教会だけの問題ではありません。弱い人や虐げられている人を擁護するため、立ち上がる時代に、自己を守る能力がたいへん小さい者にもつとも必要な擁護が否定されているというものは、まことに痛ましい矛盾です。(…)

今日この社会的混乱は、労働と資本の問題だけに限られません。多くの新しい問題が生じ、その緊急な解決が望まれています。これには疎外や高齢者数の増加、自然や環境問題など、決定的な貢献をします。

皆さんが勇気と信頼をもって自らの高貴な仕事を果せるよう、また将来の社会が皆さんにかける期待に応えることができるよう、祝福を送ります。(九〇・六・一五)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費  
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要  
 郵便振替 神戸 3-72393